実行団体 事後評価報告書	一般社団法人 aichikara	活動地域	中津川市加子母、 下呂市馬瀬地域

山村地域における若者の体験学習と継続的な交流の場の創出

E-mai　aichikara.gia@gmail.com
URL　https://www.step-aichikara.com/

資金分配団体名　一般財団法人 中部圏地域創造ファンド
資金分配団体事業名　NPO による協働・連携構築事業
事業の種類 草の根支援事業 2019
実施期間　2020 年 4 月～2023 年 3 月

AICHIKARA.GIA

1 事業概要

社会課題	①　都市部を中心に核家族化の進展、地域コミュニティ機能の衰退、利便性の高い各種サービスの普及などにより若者の社会との関わりの希薄化、人間関係の同質化が進み、若者が社会と多様な接点を結び、自らの社会参加の在り方を模索していくことが困難になっている。 ②　加子母、馬瀬においては人口減少、高齢化が進んでいる。加子母では平成 12 年から平成 27 年にかけて人口が 17.5%減少している（県 3.6%減）。高齢化率は、加子母約 36%、馬瀬 41%である。そうした変化に伴い、農業等地域の産業や地域の諸機能の担い手不足が深刻化している。
事業概要 対象者	【事業概要】 人口減少が進む山村地域において、その自然環境や伝統文化、地場産業などの地域資源を有効に活用し、地域外の若者が地域に参加できるプログラムを継続的に実施する。また、プログラム後も参加者が継続的に地域に関われるような機会や場を整備する。 実施するプログラムにおいては、地域の魅力や直面する諸課題への理解を深める機会、地域住民と交流する機会、地域の活力やその持続性を確保すべく挑戦し、貢献している実感を得られる機会、自己開示や内省の機会を重点的に設けることにより、若者にとって社会への視野を広げ、自己や他者との関わりへの考えを深めるとともに、主体的に行動し、率先して他者との合意形成を図るなど行動変容のきっかけとなるプログラムとする。 【対象者】　大学生をはじめとした都市部の若者
中長期 目標	加子母および馬瀬でのプログラムへの参加をきっかけに、地域と関わりたいという意欲を持つ若者が増えるとともに、そうした若者が気軽に再訪できる交流の機会や活動の拠点が生まれ、定着している。 若者は地域や人との関わりの中で、社会に参加する態度や技能を養うことができている。 また、外部の若者が地域資源へアクセスし、活用しやすい環境が整備されており、これにより地域の諸機能の持続性が保たれている。 さらに、地域で育つ子どもが地域に親しみ、活動する多様な機会を得ており、活動を通じて地域で働き生きていく選択肢に対するイメージを深めるとともに、地域への愛着を育むことができている。
活動方針	・地域のニーズや特徴を組み合わせ、地域滞在型の学習プログラムを作成。 至学館大学「人間力開発センター」に企画を提出し、参加者を募集する。 ・協力団体と連携することで互いの強みを生かし合いながら地域と関わり活動。

3 年 間 の 活 動 の 成 果	
事業を通して、学びや貢献の実感を持つことのできた若者	55 人
地域資源・人的ネットワークを活かした多様な若者向けプログラムの企画	14 プログラム
事業を通して、地域に滞在した若者	100 名以上
アンケート回答者（回答率 74%）のプログラム満足度	100%

2　事後計画の記載内容

2－1 主な活動とアウトプット　※アウトプットの目標達成時期は、断り書きがない限り、2023 年 3 月

活動 1

・連携する団体と具体的な連携内容の調整を進め、若者層向けの新たなプログラムの構築と試行に取り組む。(1-1)2020 年 3 月～2021 年 3 月

・学生を主な対象としたプログラムを年 4 回以上実施する。具体的には、加子母および馬瀬の地域資源を生かした自然体験や、林業や農業、文化行事等にかかわる体験を行う。また、それらの活動の中で他者との交流や体験に基づいた学習を促進する。また、実施により得られた参加者、協力者の反応を参考に更なる改善を図る。

なお、新型コロナウイルスの影響が続く場合、状況に応じてこれらの活動をオンラインで代替して実施することとし、影響が終息した場合にも、プログラムにおいて都市部と農村の物理的距離を補う等オンライン機能を有効に活用する。(1-2)2021 年 4 月～2023 年 3 月

アウトプット	様々な地域資源を活用した若者向けのプログラムを作成、実施する。		
指標　1	①プログラム実施回数　②参加者数		
	初期値	目標値	実績
	①0 回　②0 人	①年 5 回以上 ②年間延べ 50 名程度	①21 年度 11 回、22 年度 15 回 ②21 年度 50 名、22 年度 100 名超（予定）

活動 2

・若者にどのような地域参加が望まれるか、プログラム内容と地域ニーズをすり合わせる。(2-1) 2020 年 3 月～2021 年 3 月

・地域のニーズに応じた活動を展開する。この際、地域と学生の継続的な交流のため、オンラインでの企画、情報交換を積極的に行う。(2-2)2021 年 4 月～2023 年 3 月

アウトプット	地域の具体的なニーズに基づき地域の機能維持に資するプログラムに若者の継続的・積極的な参加を募る。		
指標　2	①複数回参加者数、参加回数　②複数年度参加者数		
	初期値	目標値	実績
	①　0 人、0 回 ②　0 人	①12 名以上、年 3 回以上 ②6 名以上（2022 年度）	①　0 名（年 2 回参加者 5 名） ③　6 名

活動 3

・地域の学童保育などと連携し、子供向けプログラムの構築と試行に取り組む。(3-1) 2020 年 3 月～2021 年 3 月

・地域の子供向けに、地域資源を活用し、地域に親しめるプログラムを年 5 日以上実施し、改善を重ねる。(3-2)2021 年 4 月～2023 年 3 月

アウトプット	地域の子ども達が参加し、地域との関わりを深めるプログラムを継続的に実施する。		
指標　3	①プログラム実施回数　②参加者数　③地域の学童等との連携の有無		
	初期値	目標値	実績
	①0 回 ②0 人　③無し	①年 5 日以上 ②年間延べ 30 名程度　③あり	①年 1 日 ②年 15 名 ③具体的取組の検討可能

活動 4

・若者受入れプログラムへの地域住民の参加、協力を募る。2020 年 3 月～2023 年 3 月

アウトプット	プログラムへの地域住民の参加、協力を得る。		
指標　4	プログラムに協力し参加する地域住民数		
	初期値	目標値	実績
	0 名	15 名以上	各地域 15 名程度

2－2　3 年間のインプット

	計画値		実績値	
資金	事業費　（自己資金含む）		事業費　（自己資金含む）	
	直接事業費 管理的経費	6,213,000 円 0 円	直接事業費 管理的経費	6,213,000 円 0 円
	コロナ緊急支援	670,000 円	コロナ緊急支援	670,000 円
	評価関連経費	48,000 円	評価関連経費	48,000 円
人材	内部：合計 1 人（担当者 1 人） 外部：合計 60～100 人 （都市部の若者 60～100 名）		内部：合計 3 人（主担当者 1 人、補助 2 人） 外部：都市部の若者約 150 名	
資機材・その他				

1）資金インプットの特徴、インプットに対する成果の規模や質等の妥当性・効率性

職員および学生（プログラム参加者）の移動・滞在にかかわる資金のインプットが中心。

新型コロナウイルスの影響により実施時期や人数、実施内容（交流機会の創出等）について多くの制約を受けたため、当初想定した規模や回数、内容での実施は叶わず、その点では平時に比べると効率性は低下せざるを得なかったが、そうした状況下でも地域内の既存の取組みとは異なる条件（内容、参加者、協力者等）で様々なプログラムを企画・実施することができた。

また、コロナ禍でも事業を止めず協力団体と模索しながら進めた中で、特にオンラインの手法を打合せや参加者向け説明会など様々な場面で取り入れられたことは、広域連携する当事業にとって重要な変化であった。例えば南飛騨馬瀬川観光協会の小川さんにご協力いただき実施した企画では、馬瀬に来たことがない数十人の学生に地域の情報を伝えることができた。オンラインだけでは地域の魅力は伝わり切らず、人間関係をつくるにも不十分であることも分かったが、特性を踏まえて活用できれば今後も大きなメリットを得られると考える。

2）自己資金の種類、資金調達で工夫した点

当団体は今年度で活動を休止することとなったため、資金調達面での工夫はしなかった。

活動休止に伴い会員制度を停止したため、最終年度の会費収入はなく、預金を取り崩して自己資金に充てることとなった。

3）人材インプットの役割分担等

一人の担当者が事業推進・後方事務の両方を担ったため、事務作業が集中する時期等には事業の推進力が低下せざるを得なかった。当初はボランティア等の参加により様々な協力を得ることを期待していた

が、コロナ禍の影響により、継続的な協力者を得ることが困難であった。

そうした中でも、事業内容に応じて団体内外から協力者を得ることができ、特に参加者募集用のチラシについては、継続して担当してくれる協力者を得ることができた。

また、当団体が地域側との調整を担うことにより、地域外の様々な個人・団体との連携企画も実施することができた。

3 事後評価の方針

3-1 評価の体制

外/内	氏名	所属・役職	評価の分野
内部	志治　友規	一般社団法人 aichikara 事務局長	企画アンケート作成・収集

3-2 事後評価のポイント

1	**若者が地域機能の維持に資する活動の担い手となり、その中で貢献や成長の実感を得ることができたか**
2	**若者の継続的な地域貢献により、地域の諸機能が有効に活用され維持されているか**
3	**地域の子ども向けプログラムが整備され、子ども達が地域と多様な接点を持つことができているか**
4	**地域外の若者の関わるプログラムに参加する地域住民が増え、交流の機会が増え、地域の受入れ環境がより整備されたか**

4　事業の主要な成果と、それを実現した要因分析

※アウトカムの目標達成時期は、断り書きがない限り、2023 年 3 月

4-1　若者が地域機能の維持に資する活動の担い手となり、その中で貢献や成長の実感を得ることができたか

<table>
<tr><td>成果 1</td><td colspan="3">若者が地域への貢献や自身の成長を実感できた</td></tr>
<tr><td rowspan="3">アウトカム指標　1</td><td colspan="3">①若者の 7 割以上
②社会に参加する態度や技能の向上</td></tr>
<tr><td>初期値</td><td>目標値</td><td>実績</td></tr>
<tr><td>無</td><td>①若者の 7 割以上
②社会に参加する態度や技能の向上</td><td>①7 割以上
②未調査</td></tr>
<tr><td>評価方法</td><td colspan="3">企画実施後のアンケート（任意）への回答内容
アンケートへの回答を依頼した 74 名の学生のうち 55 名（74%）から回答を得、そのほとんどが活動から何らかの学びや貢献につながったと回答</td></tr>
</table>

1）確認できた事実・成果

●滞在中の体験の実感

若者の 7 割以上が、滞在中の体験が何らかの学びや貢献につながったと回答した。

その実感には強弱があるものの、多くの参加者がそうした実感を得られる体験プログラムを作成・実施することはできた。特に、加子母においてはこれまでも様々な大学、団体等の取組みがなされてきたが、取組みの経験がない馬瀬においても体験プログラムを提供することは可能であることが分かった。

ただし、単発的な参加に留まる参加者が多かったことから、継続的な参加につながるコンテンツであったかは評価が難しい。

また、コロナ禍は悪い影響を及ぼしたばかりでなく、こうした状況下だったからこそ地域に滞在しての体験が特別なものと感じられ満足度が高まっていた部分もあった。

●「社会に参加する態度や技能の向上」の測定

当初の想定では、地域において学生が関与できる様々な活動（地域の年中行事や地域住民の会合など）を揃え、それらに連続的に参加してもらう中で、学生自身にどのようなレベルの活動をできているかを確認してもらうような活動をしたいと考えていた。その場合には、ロジャー・ハートの「参画のはしご」等を参考に活動内容をレベル分けすることで、学生が体験や挑戦を意味づける支援をするイメージであった。

しかし、コロナ禍の影響でもともとあった地域行事等は休止・縮小し、新たな取組みを行うことも難しい状況が続いたことで、そもそも活動の選択肢を広く持つまでに至れず、実施可能なことを都度見つけ、行い、感染が拡大したら中止・休止するというような状況の中で、当初の構想を実行に移すことができなかった。

こうした中で当団体の活動休止が決まり、地域の協力者に活動の継続性を保証できなくなったことも、活動への協力を取り付け、内容の幅を広げることをより困難にする要因となった。

2）成果（課題）が生まれた要因

●教育・ボランティアコーディネーターの存在

参加者が地域滞在中の体験にポジティブな意味づけをするうえでは、当団体が参加者へ体験の場を提供しながら共に過ごし、参加者の体験に対して個別的なフィードバックをしたり、参加者が接したり注目したりしたものについて補足説明を加えたりするような役割を担った部分は大きいと考える。そうで

なければ、一つ一つの活動は参加者にとって単なる無償労働、徒労のように感じられてしまうリスクもある。

参加者に「新しいことを学べている」、「地域との交流や、貢献の実感が得られて有意義だ」と感じてもらえるような活動にするためには、参加者と地域の住民が出会う場で扱われる情報や交流の方法等をその趣旨に沿ったものに整えるためのコーディネーターの役割が大きい。

●コロナ禍で地域外の人と交流する必要性の乏しさ

当初、加子母や馬瀬におけるコロナ禍に対する危機感の強さは、高齢者の多さや、ソーシャルディスタンスを都市部と比較して厳密に守れる環境があること等から、都市部と比べても強く、特に一次産業従事者は日ごろ地域外の人と関わる機会が少ないことから、そうした状況の中であえて地域外の人との交流の機会を設ける必要性が乏しく、地域の協力者を得て活動を創出することは極めて困難となった。

そうした中でも、下呂市は観光産業が盛んであり、コロナ禍における制限の緩和を求める雰囲気が比較的強かったことから、馬瀬での活動再開に期待し調査や準備を進め、感染状況の推移のほか地域内での摩擦などにも注意しながら企画の実施を重ねていくことができた。

●地域の発行物の活用

当団体が新たに参入した馬瀬において、地域内の動向を詳しく知るうえでは、馬瀬川プロデュースの人的ネットワークの他に、馬瀬地方自然公園づくり協議会が毎月発行している「馬瀬地方自然公演だより」に情報がよくまとめられており、バックナンバー含め非常に参考となった。地域住民との共通の話題を持ち、協力の方向性を探るのに役立ったほか、学生の活動中の補足説明にも活用できた。

３）気づきと今後に向けて

●地域での活動への継続参加にはモチベーションを高めるテーマ設定が必要

企画への複数回の参加により地域を再訪する学生もいたが、「授業の履修」の範囲内であり、毎回異なる「初めての体験」を求めての参加であったため、その枠を越えて地域への参加の度合いを深めようというまでには至らなかった。

この間は感染防止の観点から地域住民との接触を制限してきたことから、そうした制限が無くなれば、学生の地域での取組みを地域内の他団体等と合同で実施したり、地域住民からも広く参加を募ったりするなど地域により開かれたものとしていくことで、地域に理解・協力の機運を広めるとともに学生の学習・貢献実感を高められる余地はあると思われる。コロナ禍で活動を縮小・停止していた団体等も多く、様々な連携の余地を調査しきれていない部分もある。

ただ、都市部の学生・若者が可処分時間を振り向ける興味関心の対象は多様であり、そうした中で継続的な関わりを持つ対象として選択してもらうことは容易でないとも感じられ、コロナ禍の制約が無かったとしても、外部の若者が継続的に地域に参加する条件を整えきれる確証は得られない。継続的に参加したいコミュニティ（人の集う場、人間関係）があり、そこに信頼できる管理者や仲間、先輩後輩などの存在があることは重要だとしても、例えば加子母木匠塾の場合は「木造建築を実践的に学ぶ」ということが参加者のキャリアにも生かされるものであるように、活動内容として学生が長期的なモチベーションを向ける対象になり得やすいテーマを示せるよう地域側でのさらなる検討が必要である。

●初めての体験への参加ニーズは高く、地域への好影響も確認できた

長期的な参加につなげることは難しかった一方で、単発的な初体験のニーズが強いことが感じられた。

滞在する学生が同一でなくとも、入れ替わり立ち替わり継続的に地域に滞在することで、地域に驚きや喜びなど新しい空気感が生まれ、また具体的に助かる部分があり、それが地域側の新たなアクション

（活動への支援・協力など）につながり得るのだとすると、単発の学生参加者を継続的に受け入れていくことにも地域を変えていく可能性がある。そして、そうした地域側の前向きな変化が、長期的に関わる若者を生み出す土壌づくりにもつながっていくと考えられる。

地域側が若者を受け入れやすい環境に変わっていくためには、そうした対象を意識し、様々な形でコミュニケーションを取っていく必要があることから、必ずしも継続的な関わりにつながらないとしても、やはり地域外の若者を地域に招き入れるような活動を継続していけることが望ましい。

4）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

・学生の声として「農業を体験したことがないから参加した」「この季節にも滞在してみたかった」「違う体験もしてみたかった」「体験は貴重だったが、大変だったので継続的にやろうとは思わない」等があり、「初めての体験」であることから得られる新鮮さは大きいと改めて感じられた。そうした体験を繰り返したいと思うかは、別の動機が必要となる。

・地域側からも「学生を見かけることが増えて、地域の雰囲気が変わってきた」「学生誘致の活動が注目されており、市役所内でも話題になっている」「学生が今後も滞在するなら、手伝ってほしいことがある」「活動を支援したいという声がある」等の反応が得られた。

4 -2 若者の継続的な地域貢献により、地域の諸機能が有効に活用され維持されているか。

成果 2	地域のニーズを踏まえたプログラムへの若者が参加し、地域貢献が実現した		
アウトカム指標　2	②　地域で役割を担う若者の数・役割の内容 ②　若者による地域貢献の内容		
	初期値	目標値	実績
	木匠塾参加学生によるトマト収穫補助、祭り運営参加、古民家を活用した学童保育の事例あり	①3 人以上が地域で具体的な役割を持つ ②初期状態に加え、遊休農地の活用、川・水路等の清掃活動への参加 ③地元住民の評価	①0 人 ②草刈り支援、トマト収獲等の補助、観光施設補助 ③受入先となってくださった方々からは継続してほしいというお声を多くいただけた。住民との関わりは限定的であったが、地域で話題となり新たな支援の申し出もいただけた。
評価方法	プログラムに参加した若者や地域住民へのヒアリング		

1）確認できた事実・成果

●調査や準備・調整を経て、最終年度には草刈りやトマト収獲等のニーズに応えられた

・　当事業の初期から確認していた馬瀬の空き家周辺、耕作放棄地等の草刈り支援のニーズのほか、季節的な収獲支援、観光施設業務の支援ニーズを踏まえたプログラムを企画・実施することができた。

・　草刈り支援は、初年度に NPO 法人馬瀬川プロデュースが行ったアンケート調査で特に要望が多かったものであり、学生が戸別訪問により行ったヒアリング調査でも多く挙げられていた。馬瀬川プロデュースを中心にチームで作成した草刈りニーズを可視化したマップを参考にし、仮払機を使用する際には安全講習を行ったうえで、馬瀬川プロデュースの指導と立合いのもと支援活動を行った。2 年目にも試行的に草刈り活動を行うことができたが、最終年度には特に重点的に実施できた。地域の様々な地区へ出向くことで活動を認知していただくとともに交流の機会となったほか、草刈りが行き

届かない状況に目を向けることで地域の変化や獣害などの課題に意識が向くきっかけともなった。活動の準備・調整を担った馬瀬川プロデュースによると、学生を誘致しての草刈り活動は行政からも注目され、ラジコン式草刈り機の貸出し対象に NPO 法人が追加されたそうである。当団体の Instagram で発信した活動報告は、2021 年度、2022 年度の 2 年連続で「まぜ草刈りフォトコンテスト」で入賞し、地域での活動の認知度向上につながった。

・　現地調査により、山村地域には自然環境と結びつきの深い産業・活動が多く、季節により人手が必要となる一方、過疎化が進む地域ではアルバイトの確保などが困難であり、大学生の活動に関心が向けられていることが分かった。教育プログラム構築のうえでは、地域の特色ある産業を学ぶ機会や移住者・新規就農者との交流からキャリア観を深める機会をプログラムに取り入れられる点で、農業の現場を体験する活動は適している。2 年目に加子母で農業体験プログラムを試行したところ学生の参加申込の反応（速度・件数）が大きく、学生側の農業体験ニーズが高いことも確認できた。加子母においては生産組合のコロナ対策が厳格であったことに加え、新規就農者の SNS での情報発信についてルールが検討段階にあるなど学生が参入しづらい状況にあったため継続化はできなかったが、馬瀬で関心を持って下さった農家の方を紹介いただけたため、冬季にほうれん草の収穫で学生の受入れを試していただいたうえで、繁忙期となる夏季に重点的に活動を行った。活動中は、学生の滞在拠点に足を運んでいただき、移住や新規就農の体験談をお話いただくなど、教育プログラムという趣旨を理解したうえで学生に関わってくださった。ただ、収獲支援については、収獲時期に学生が連続的に滞在しない場合には結局学生の作業量を含めず生産量を決めることになるため、短期的にしか活動できない場合には学生の貢献余地は小さくなるとのことである。

・　農業現場同様に季節性の強い観光施設業務の支援としては、2021 年度、2022 年度の 2 年にわたり南飛騨馬瀬川観光協会の運営する「水辺の館」での子ども向けのあまご掴み取り体験を補助する活動を行った。中心的に受入れを担ってくださった小川さんは元地域おこし協力隊の方であり、地域の暮らしや仕事についての説明も分かりやすく、オンライン企画も担ってくださった。2021 年度には学生の滞在拠点に来ていただき地域や観光協会の業務について解説もして下さったが、繁忙期に負担となったため、2022 年度は取りやめとした。これにより作業の比重が大きくなり教育プログラムとしては質の低下が感じられたため、繁忙期を避けたオンライン企画とうまく組み合わせる等できるとなおよかった。忙しい中でも学生の関心や得意分野に応じて鮎の串打ちや新メニュー検討の機会を用意していただく等、教育プログラムという側面にも協力的に対応していただいた。夏季繁忙期の水辺の館は、季節性の事業やヘルプとして地域おこし協力隊員をはじめ地域の様々な人材が出入りする環境であり、休憩中の何気ない交流なども学生にとっては刺激が多かったようである。

・　その他、地域の清掃活動や雪かきの支援ニーズもあったが、地域の都合や天候により発生するニーズを前もって掴むことが難しかったことから、参加者を募集して活動を実施することはできなかった。

　なお、地域の清掃活動のうち山道の側溝の清掃活動に視察を兼ねて参加させていただいたが、非常に広範囲にわたるとともに、体力を要する作業であったことから、至学館大学で体育を専攻する学生が来れば高い貢献を期待できたと思われる。長時間にわたる大人数での単純労働は、地域外からの参加者にとっては多くの地域住民との交流の機会となることから、スケジュール検討段階から加わることができればプログラムの一部に組み込むことを検討できた可能性はある。

・　馬瀬の花火大会は地域外から多くの来訪者があり、多くのスタッフが必要となるイベントであるため、学生が地域側のスタッフに加わる案を検討したが、多くは駐車場の案内役等であり、せっかく花火が上がるのにそれを見ることができない役割につく可能性が大いにあったことから、地域側からまずはお客さんとして来てほしいという意見が出て廃案となった。

●役割を持ち継続的に地域に関与する若者は増やせず

　これまでの活動は単発的な内容に留まり、地域内外の人が集う場となるような拠点整備に発展させることはできず、そこから外部の若者が具体的な役割を担う状況を創出することもできなかった。

２）成果（課題）が生まれた要因

・馬瀬川プロデュースによる地域ニーズの見える化をはじめチーム内での情報共有や提案のほか、カシモールの地元ライターや南飛騨馬瀬川観光協会の小川さんなど活動に理解ある方が当団体と地域住民をつなげてくださったこともあり、地域での様々な活動が実現した。
・地域を常に外部の若者に開かれた状態にできなかったこと、内外の人が集い関係を深められる場を連続的に設けられなかったことの要因としてはコロナ禍の影響が挙げられる。

活動が常態化せず、中断が繰り返され、見通しが立ちにくかったことで、企画・運営側としての協力者を確保することも困難となり、マンパワーとしては心もとない状態となった。

馬瀬地域側の受入団体であるＮＰＯ法人馬瀬川プロデュースも初年度に団体の体制を大きく見直すこととなり、受入れ環境整備のための人員や技能、活動拠点等の資源が縮小した。

ただ、もしそれらが計画通りであったとして、地域での活動を継続的に担ってくれる若者が本当に現れてくれたかは確証が持てない。これまで実施した活動に「満足」してくれた学生は多いが、「１度きり」の活動に参加して満足することと、「継続的」に活動に参加しようとすることとの間にはギャップがあると考えられるため、そうした動機を喚起する環境をこちらがどうしたら整備できるかはコロナ禍の制約が解消されていく中で引き続き検討を深める必要がある。

単発的な企画でも地域側が実際に助かっており、地域に変化が生まれる機運が生じうるのだとすると、継続的な参加が全てではなく、単発的な参加者も重要であるが、そうした参加者の受入れを継続的に行うためにもマンパワーが必要であり、そうした活動の拠点が発展していくためにも、そこに定着し、役割意識を持って関与し続けたいと思ってくれるような人材を地域内外の両面で増やしていかなくてはならない。

３）気づきと今後に向けて

●アフターフォロー戦略の必要性

地域に滞在し、関心を高めてくれた多くの貴重な参加者に対するアフターフォローの戦略は不十分であった。新型コロナウイルスの感染状況の変化に対応するうえで企画の延期や中止もあり、後手後手になってしまった面があったが、オンライン環境を活用するなどして、参加者のグループを作り、関心を継続して持ってくれている人を支える活動をする余地はあったと考えられる。

そうして参加者間の関係性を新たに形成できたなら、そこから新たな参加の動機が芽生えたり、一部分でもコーディネーターの役割を担ってもらうことで、地域への帰属意識の向上や、運営側の人員不足の補強につなげることもできたかもしれない。

地域を訪れてくれた若者とその後どのように関わるかについては、企画実施前から地域側でよく検討し、方針を持っておく必要がある。

●コーディネーターの有効な配置

２地域で並行して活動したことがリソースの分散につながった面もあることから、参加者の継続的な関わりを途切れさせないようにするためには、コーディネーター等参加者の主な窓口になる担当者が一定期間１つの地域に集中するか、あるいは地域ごとに参加者に対応する担当者を分ける等、より効果的な体制や人員配置の検討が必要と考えられる。

４）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

・至学館大学の栄養科学科の学生の多くは管理栄養士を目指しており、参加動機として食材の特徴や生産現場への理解を深めたいという声を多く聞くことができた。

農業体験のほか、郷土料理の調理法等にも関心を持つ学生が多く、コロナ禍でなければ、地域の方に

指導を受けながら郷土料理を作るような取組みもできた可能性がある。加子母では、公民館事業の住民向けの郷土料理作り企画が最少催行人数に達しなかったとのことだったのであり、地域外の学生の参加によって、そうした住民向けの機会の確保にもつなげられるかもしれない。

馬瀬川プロデュースに調整いただき、馬瀬にあるケイちゃん焼きの加工工場を見学させていただいた際にも、栄養科学科の学生が特によい反応をしてくれていた。こうした学生の関心に沿って、地域の食をテーマとしたプログラムも実施可能かもしれない。

4-3 地域の子ども向けプログラムが整備され、子ども達が地域と多様な接点を持つことができているか。

成果3	地域の子ども向けの交流・体験プログラムへのニーズが確認できた		
アウトカム指標 3	① アウトカムを評価する保護者の割合 ② 子ども自身の地域で新たな発見、体験、出会いを楽しむことができた実感		
	初期値	目標値	実績
	無し	① 参加した子どもの保護者7割以上 ② 参加した子ども7割以上	①未調査 ②未調査
評価方法	地域で子どもと関わる活動を実施している団体等の関係者へのヒアリング		

1）確認できた事実・成果

・加子母・馬瀬ともに、大学生世代との交流のニーズは多く挙げられた。大学生世代は地域にほとんどおらず、子どもがそうした世代と関わる機会が乏しいことが理由である。コロナ禍でなければ、地域外の大学生と地域の子どもが関わるような企画にはニーズがあることが分かった。

・既に地域の子どもが集っている場である加子母の学童保育のスタッフからもこうしたニーズを聞くことができていたため、子どもが学童に滞在する時間が長くなる夏休みなどに、学童保育と連携した子ども向けのプログラムを実施できる可能性があった。

実際に学童保育で何度か子ども達と過ごしてみたところ、スタッフとともに子ども達からもとても喜ばれた。日本福祉大学の学生とも数回学童保育に参加したが、大学生に対しては年齢の近さからより親近感を持つようで、子ども側からもとても積極的に関わっていた。日本福祉大学の学生は遊びの他、子どもに対して生活についてのヒアリング調査を行っていたが、子ども達はしっかりと答えていた。スタッフの見守りもある中で、大学生が加わって活動しやすい環境であることを確認できた。

⇒ 夏季に地域での農業体験をメインにして大学生を受け入れた場合、作業が早朝から午前中までとなる予定であったため、午後は学童保育に参加して子どもと関わる活動を計画していた。大学生への滞在直前の説明会まで実施していたが、感染拡大のため中止とした。

・かしも明治座についても、地域住民に活用してもらえるような取組みが模索されており、地域の子どもがかしも明治座に関わる取組みのニーズがあることが分かった。

⇒ かしも明治座での「子どもガイド」の検討をしたが、かしも明治座の秋の繁忙期と重なったため着手しなかった。

⇒ 名古屋で活動する「劇団うりんこ」を招き、地域の子ども向けのワークショップを行えることとなったため、加子母の芝居小屋であるかしも明治座を活用して子どもたちに貴重な体験を届けたかったが、冬季は屋外とほとんど変わらない気温となるため、子どもの体調が悪化するおそれがあり、かしも明治座での開催は叶わなかった。

・加子母木匠塾が改修を重ねてきた古民家「松屋」や、地域のお寺「法禅寺」も子ども向けの寺子屋（勉強のための場）などのために活用できる可能性があることが分かった。

⇒　法禅寺と調整を進め、地域の子ども向け寺子屋を実施する予定であったが、新型コロナウイルスの感染が拡大したため、話し合いのうえ中止した。

・道の駅かしもの田口大志さんと連携することで子ども向けに自然体験プログラムを実施できる可能性があることが分かった。

・加子母の子育て団体「はっぴーたーん」と連携した幼児向けイベントを実施できる可能性があることが分かった。大学生が幼児の相手をすることができれば、その間ママさんたちは子どもが手を離れることとなり助かるとのことだった。

⇒　はっぴーたーんもコロナ禍で活動を縮小しており、具体的な機会を得られなかった。

・至学館大学には「子ども教育学科」があり、子どもと交流する企画のニーズは学生側でも高いことが分かった。馬瀬で取り組んだあまごの掴み取り体験のサポート活動（山村スタディーツアーvol.2 および vol.6）や「ごちゃ馬瀬 Camp！」には、「子どもと接する活動を経験したい」という動機の参加者が集まった。

・地域の子どもの人数が限られることから、一緒に集団スポーツをしてほしいという要望も多く聞かれた。至学館大学には「健康スポーツ科学科」があり、スポーツインストラクターや体育の教師を目指している学生も多いため、学生側からも応えやすい要望であった。

・地域の子ども向けに活動を行う場合、活動場所に子どもが集合するためには保護者に送迎を担ってもらうなど子どもの移動手段を確保することが課題であるが、小学校の授業の一環として活動を行う場合には、小学校の所有するバスにより学校から移動することも可能であることが分かった。

2）成果（課題）が生まれた要因

・コロナ禍において地域の子どもと地域外の人が交流するような企画は実施が難しく、地域内外から参加者を募った場合に、感染状況やその時々の危機意識に応じた内容の調整が難しかったことから、企画実施に至らなかった。

・なお、2020・2021 年度には、当団体と東北被災地の関係の中から立ち上げられた「大川小学校　未来をひらくプロジェクト」に加子母の工務店とともに加子母小学校に関わっていただくことができ、子ども達が地元産の東濃ひのきに触れたり工務店に足を運んだりする機会をつくることができたが、これは被災地側のニーズを踏まえた単発的なプロジェクトであったことから、子どもたちが地域と多様な接点を持つうえでの継続可能な取組みにはつなげられていない。

3）気づきと今後に向けて

・　地域側には地域の子どもを対象とした活動のニーズや協力者、活動場所があることを確認できた。子どもを対象とした活動については特に安全に配慮する、他の社会活動と足並みを揃える必要などがあったことから、継続的な活動に着手することはできなかったが、制限の緩和に伴い実現可能な活動案もあることから、これまでに得た前項１）にかかわる情報等を地域内で共有していく。

4）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

・　加子母は豊かな自然に恵まれているが、子ども達は都市部の子どもと同様にゲーム等で遊ぶため自然の中で遊ぶことは必ずしも多くなく、そうした機会をつくってほしいという要望を伺った。

・　学童保育に来る子ども達は体を使って遊ぶことが好きだが、スタッフは高齢で一緒に遊べないことが多いため、大学生には読み聞かせや会話による交流よりは、体を動かすような活動を一緒にしてもらえるとよいとのことだった。

4-4　地域外の若者の関わるプログラムに参加する地域住民が増え、交流の機会が増え、地域の受入れ環境がより整備されたか。

成果 4	若者の関わる地域でのプログラムへの認知が高まり、交流がすすんだ		
アウトカム指標　4	①　地域住民のプログラムを通じた受入れ体制や意欲 ②　参加した若者の再訪しやすい環境		
	初期値	目標値	実績
	無し	①　プログラムが地域に受け入れられ定着する ②　参加者のうち気軽に再訪できる関係性を持つ若者 10 名以上	①　認知はしてもらえたが定着とまでは言えない ②　事業外での再訪者は未確認
評価方法	プログラムに参加した若者や受け入れに協力した地域住民へのヒアリング 参加者アンケート		

1）確認できた事実・成果

・　地域の受入側では、受入れ前は「人の手が必要」という労働力ニーズが大きいが、実際に受け入れていただくと、学生が初めての体験に新鮮な反応を示しながら取り組むので、作業の中に楽しさや張り合いが生まれたり、受入れ側にとっても自身の仕事を見つめなおせたり、非日常的な体験になったりすることが分かった。学生の受入れは金銭的な対価のうえで労働力を確保することとは異なるので、出会いと交流を受入れ側の人にも楽しんでいただけることが重要であり、それが参加者側にも伝わり滞在中の居心地のよさにもつながると再認識した。今回学生を受け入れて下さった方々は非常に丁寧に学生と関わってくださり学生を派遣する側としても安心感を持てた。そうした丁寧な、人と人としての関わりが双方によい経験をもたらしていたのではないか。外部の若者が関わりやすい地域になるためには、地域住民が外部の若者に開かれていかなくてはならず、それを同時に進めていかなくてはならない。そのためには、参加者だけでなく、受入れ側にとってもよい体験となるよう設計・運営する必要がある。

・　外部の学生が参加することで様々な作業やその背景を説明する必要性が生じ、受入れ側がその役割を担うことで、教育コンテンツを実施する素地が地域内に整えられていく。これは受入れのない地域には育たない外部とのコミュニケーション力、受援力（支援を受ける力）であり、地域に学生を受け入れ続けることが他地域との差別化につながりうる。
しかし、必要性が生じた際に急にうまく説明できるということにはならないので、学生へ伝わりやすい説明をできる人は現状では地域内で限られるとも感じられた。

・　コロナ禍の影響により活動自体が計画的に進められなかったことや、感染対策への危機感の個人差による地域内の摩擦を回避しようとしたことから、活動への理解や支援を広げるうえでの地域向けの情報発信に計画的・積極的に取り組めなかった部分がある。

2）成果（課題）が生まれた要因

・学生の素直な反応
・受入れ側の方々の協力的な姿勢、面倒見のよい人柄
・移住者や新規就農者、特に若くして明確な目的意識を持って地域に参入した地域おこし協力隊経験者の方々等の言葉は学生に伝わりやすく、馬瀬でこうした方々が活躍されていることは活動のうえで大きな助けとなった。

３）気づきと今後に向けて

●コーディネーター内製化の可能性の検討

３年間の活動においては、コロナ禍のほかにマンパワーによる制約は大きかった。

当団体が担った教育コーディネーター、ボランティアコーディネーターというような役割を地域内で担える人が増えれば、受入側の体制が強化され、活動をより効果的に、継続的に行える可能性が高まる。

今後も学生を受け入れて活動を継続し、発展させていきたい場合、地域内でこうした役割への理解や技能の向上のための機会を設けたり、担当者を地域外の研修やネットワークに参加させたりする等の地域側の受入環境向上に向けた取組みを併走させられるとよい。

●地域向け広報戦略の検討

参加者のニーズやプログラムの狙い等、活動に対する地域側の理解の度合いが高まるほど、参加者と地域住民との交流はより生まれやすくなり、地域側から参加者への様々な働きかけもより効果的なものになると考えられるため、参加者の滞在体験の質の向上（または低下リスクの防止）や、地域における活動の定着・発展につなげるうえでも、地域内向けの広報により注力できるとよかった。

特に新たな試みを理解してもらう場合には、情報発信の回数以上に内容が重要と考えられるため、発信内容についてよく検討し、計画的・戦略的に取り組めるとよかった。

ただし、継続的かつ効果的に取り組むためには相応のリソースも必要となるため、地域の情報環境や発信側のマンパワー、スキル等を踏まえて最適な方法をよく検討する必要がある。

４）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

・学生を受け入れてくださった農家の阪田さんからは、学生の受入れにより作業が捗っただけでなく、とてもにぎやかな時間を過ごすことができ、素直に感想や疑問をぶつけてくれる学生との交流が楽しかったと言っていただけた。学生受入れにあたり、味比べのために複数の品種を育てて下さったり、休憩の環境についても相談を持ち掛けて下さるなど、非常に協力的に対応していただけた。作業中の学生への説明も手厚く、回数を重ねるごとにさらに充実していった。学生の誕生日には滞在拠点まで来ていただき、サプライズでお祝いしていただく等、学生の滞在経験がよいものとなるよう気を配ってくださっていた。

・水辺の館の小川さんからは、オンライン企画含め学生の反応は参考になるとの評価をいただけた。

・馬瀬などでサイクリングツアーを実施している UMESEKO tour の世古さんからは、地域に学生が滞在する場合には協力したいと申し出があり、夏季の活動中には多くの学生に移住や地域おこし協力隊、インバウンド事業立ち上げの体験談を話してくださった。

5 特筆すべき成果
～予測していなかった成果、副次的な効果、注目すべきエピソード等～

5-1　学生間で地域や事業の話題が扱われることが増えた

継続的にプログラムを実施することにより、至学館大学の学生間で地域や事業についての話題があがることが増え、認知度向上および口コミでの参加者増加につながっていっていた。

5-2　チーム連携により地域へのインパクトが増大した

加子母木匠塾と役割分担をしながら、馬瀬での活動を連続して行うことにより、新たな取組みが行われていることを地域に印象付け、注目を集めることで活動への理解や支援につなげることができた。

5-3　学生との交流機会の活用

水辺の館では、活動した学生から最終日に改善アイデアを聞く機会を設けていた。

その中で学生から「あまご掴み体験の順番待ちをしている小さな子どもから「早くやりたい、待ち切れない」などの声を多く聞いたので、待ち時間を楽しく待ってもらうために遊ぶスペースなど作るといいと思った。例えば紙を磁石とかで簡単に釣り体験ができるスペースなど作れば、釣りの楽しさとか魚についても興味を持ってもらえるのでは。」との提案があり、導入コストも安価で済むことから、釣りスペースの設置や渓流魚のペーパークラフト用シートの提供を始めたところ、利用者から好評を得ているそうである。

他、栄養科学科の学生に新メニュー開発の機会を設けていただいた際には、地域の規格外トマトを活用したメニューは開発できなかったものの、かき氷の味のレパートリーを増やす提案を採用いただき、こちらも人気だそうである。

また、農家の阪田さんも、新たに挑戦している地域では珍しい品種の白ナスを売り出すためのキャッチコピーのアイデアを学生に聞くなど学生との交流から価値を生み出そうと試みてくださっている。

6．協働・連携による課題解決の体制の充実

6-1　チーム内の協働・連携

1）チーム内で協力した内容

C0：かしもむら、　C１：馬瀬川プロデュース　C3：学生団体 加子母木匠塾

（1）山村スタディーツアーvol.4~6 等

協力活動の項目	C0	C1	C3	協力した内容
広報	○	○	○	「自然と生きる若者ら通信 vol.2」を発行
内容的な連携	○	○	○	馬瀬川プロデュースを中心として草刈り活動をチームで実施
作業面の手伝い		○		草刈り講習、実践指導など
その他				

協力による効果

・馬瀬川プロデュースが作成した草刈りマップに基づき、馬瀬川プロデュースの指導を受けながら草刈り活動に取り組んだ。最も大規模に取り組んだ日には、全協力団体合同で取り組んだ。

・vol.4 参加学生のうち 2 人が馬瀬を再訪したい気持ちを抱いてくれていたため、馬瀬川プロデュースの調査活動の調査員として受け入れていただいた。

・NPO かしもむらから南飛騨馬瀬川観光協会の小川さんを紹介していただき、馬瀬での活動が広がった。

・その他、aichikara が至学館大学の学生向けに行っている企画に加子母木匠塾の有志の学生が参加することで、多様な交流につながった。

（2）加子母木匠塾へのプログラム提供

協力活動の項目	C0	C1	C3	協力した内容
広報				
内容的な連携	○		○	当団体によるプログラム実施に向けた調整・情報共有
作業面の手伝い			○	参加者募集・参加者名簿作成・事務連絡
その他				

協力による効果

当事業は、学生を中心とした若者の力を活かすことで地域の活性化を目指すものであったが、コロナ禍の影響の長期化により、既存の活動も休止・縮小に追い込まれる事態となった。学生の活動は一度途切れると修復が難しく、当団体も主要事業を終了することとなった。

そうした状況から、加子母で四半世紀続く加子母木匠塾の活動を重要な地域資源と捉え、その存続・再活性化を図ることが現時点では重要との課題認識から、現地・対面での活動が急減し関係性が希薄化していた木匠塾メンバー間のコミュニケーション促進・関係強化のための研修プログラムを提供した。

（2022 年 2 月に主要メンバー向けオンラインプログラム、6 月に加子母にて合宿プログラム実施。）

（3）その他

協力活動の項目	C0	C1	C3	協力した内容
広報				
内容的な連携	○			
作業面の手伝い	○			
その他	○			

協力による効果
・カシモールでの地元ライターのコミュニティに継続的に参加させていただいており、記事校正のほか、地域の和菓子屋さんを取材先とした記事を 1 本書かせていただき、関係者とのつながりが深まった。
2023 年 2 月には、ライター向け研修としてインタビュー形式のワークショップを実施した。
・ほか、滞在中住居の細かなサポートをいただいている。

2）自団体の貢献と体制整備

(1) 自団体がチームに対して行った協力内容、その効果と評価

当団体の強みである教育プログラム構築およびボランティアコーディネートのスキルを活かし、地域における新たな活動アイデアを提示し、実践できた。

チーム内の動きにも目を配り、前項 1)のとおりチームの取組みが最大化するよう活動地域の役割分担や、他団体の活動の支援に取り組んだ。特に加子母木匠塾に提供した研修プログラムについては、NPO かしもむらや加子母木匠塾からその後の活動の活性化につながったと評価をいただけた。

（2）自団体の体制整備、知見やノウハウの蓄積についての変化・成果と評価

自団体では主要事業の終了に伴い無期限の活動休止が決まり、当事業の継続も困難となった。

そのため、当団体の知見等については、協力団体および至学館大学人間力開発センターに引き継ぐこととしている。

6-2　支援対象者・参加者の参加促進、関係の形成

1）支援対象者・参加者の増加・広がりの実績、成果につながった工夫・協力等

コロナ禍の影響もあり、既存の関係性の枠内に留まった部分は大きいが、チーム内で人的ネットワークを共有できたことで、新たな活動に取り組むことができた。

2）支援対象者・参加者の変化、変化が生まれた要因・工夫

・　参加学生に対しては、オンライン形式で事前説明会を実施し、企画の趣旨や地域住民との交流の意義、ボランティア活動の意義をよく伝えていたことから、活動時の参加態度が受入れ側に評価されることにつながった。学生の熱心で前向きな態度を受けて受入れ側も丁寧に関わってくださったことで、学生側の高い滞在満足度にもつながった。
・　受入れ経験を重ねることで地域外から他世代を受け入れることにも慣れるため、さらなる活動アイデアや受入人数の調整など受入れ側からの提案が増えた。

6-3　課題解決に取り組む協力関係の変化

1）協力関係構築の実績

本事業前の関係
・aichikara は加子母にて長年被災地の子ども支援の活動等を継続。その際、多くの大学生ボランティアを受け入れてきたが、大学生は被災地から来た子どもをサポートする役割を担ってもらっており、加子母という地域に注目する活動ではなかった。 ・支援活動実施のうえで、NPO かしもむらとは調整・相談等をさせていただく関係にあった。その他にも、地域の方々に企画実施に様々な協力をしていただいていた。 ・加子母木匠塾やＮＰＯ馬瀬川プロデュース、馬瀬地域とは関係を持っていなかった。

事業を通してできた関係
・大学生向けに地域の特徴や課題に注目してもらうような企画を実施。 特にこれまで関係性を持たなかった馬瀬においても活動を展開。 ・チームが形成されたことにより、新たな協力関係のもとで情報・経験を蓄積。 「地域受入れ側としての NPO かしもむらと NPO 馬瀬川プロデュース･外部から活動に訪れる aichikara と加子母木匠塾」という関係に留まらず、加子母木匠塾の活動を aichikara が支援したり、NPO かしもむらによるカシモールの取組みに aichikara が参加する等、多様な協力関係につながった。

事業を通してできた関係			
	1	NPO かしもむら	加子母での活動中の拠点手配・整備支援、地域の情報・住民の紹介等
	2	馬瀬川プロデュース	馬瀬での活動中の拠点提供、草刈り支援活動のための調整・指導等
	3	加子母木匠塾	aichikara との役割分担、合同で活動等
	4	至学館大学	取組み継続のための検討への参加
	5	南飛騨馬瀬川観光協会・阪田紀行氏	学生の継続的受入れ・活動機会の提供
	6	UMESEKO tour 世古氏	移住や職業選択についての学生向け講話の講師
	7	法禅寺	子ども向け寺子屋企画への会場提供等の協力
	8	学童保育（加子母）	大学生と地域の子どもの交流への協力
	9	中田祥子氏	参加者募集チラシの作成、障がい児受入企画「ごちゃ馬瀬 Camp!」のコーディネート等

2）協力関係を構築する上で行った工夫、評価

地域における活動メニューの幅を広げるため、できるだけ地域に滞在し多くの場や人との接点を持つように努めた。そこで得た情報や人脈を協力団体間でも共有するよう意識した。

他分野での協働を目指す場合、言葉だけでは伝わりづらいことから、まずはやってみる、形にしてみることで意思疎通のための共通体験を持つことを目指した。

７．結論、今後の展望、教訓

７-１　結論：中長期アウトカムに対する本事業の妥当性

・加子母および馬瀬でのプログラムへの参加をきっかけに、地域と関わりたいという意欲を持つ若者が増えるとともに、そうした若者が気軽に再訪できる交流の機会や活動の拠点が生まれ、定着している。若者は地域や人との関わりの中で、社会に参加する態度や技能を養うことができている。 ・また、外部の若者が地域資源へアクセスし、活用しやすい環境が整備されており、これにより地域の諸機能の持続性が保たれている。 ・さらに、地域で育つ子どもが地域に親しみ、活動する多様な機会を得ており、活動を通じて地域で働き生きていく選択肢に対するイメージを深めるとともに、地域への愛着を育むことができている			
事業実施プロセス	★★☆☆☆	事業成果の達成度	★★☆☆☆☆

★★★★★　想定した水準以上にある　　★★★★　想定した水準にある　★★★　想定した水準にあるが、一部改善点が必要
★★　想定した水準に達するのに改善が必要　　★多くの改善の余地がある

●上記のように結論を出した理由

・コロナ禍の影響もあり、再訪しやすい状況をつくり出しきれなかった。また、多くの学生が授業の枠内での滞在に留まり、履修後に再訪してもらえるような具体的な受け皿が用意されやすい状況が生まれるところまで取り組めなかった。

・拠点について、馬瀬においては、NPO 法人馬瀬川プロデュースの事務所を滞在拠点として活用できた。活動を共にした馬瀬川プロデュースへ連絡すれば滞在の準備もしていただける状態であり、再訪して滞在しやすい施設である。加子母においては、当初地元の工務店所有のログハウス群が活用されていないことから、活動拠点として活用していくことを検討していたが、新型コロナウイルスの感染拡大により活用できない状況が続き、ガス等の設備を撤去することとなったため、今後の活用を断念した。代わりに地元の工務店や市所有の施設を都度借りることで拠点としたが、その他の用途としても使われる施設であるため都度調整が必要であり、参加学生単独で再訪しやすい拠点とはできていない。

・若者が滞在施設、農業や草刈りの現場、観光施設などを活用して活動することができたことで、今後類似の取組みを行う場合に地域側とイメージを擦り合わせやすくなり、理解や協力を得やすい状況へとつながっている。

・学生の滞在中の活動に地域の子どもを取り込めなかった要因として、コロナ禍の影響のほか、それに伴う加子母での当団体の他事業休止が挙げられる。これにより、専門性を持ったスタッフを内部で確保することが困難となった。子どもを受け入れて活動をするためには安全性確保のためにも、子どもの人数に応じた十分な人員を確保する必要がある一方、感染対策を徹底する必要があり、学校や他団体等、地域の理解・協力を得た単発的な取組みに留まった。

７-２　今後の取り組み

当団体はコロナ禍での活動縮小によりボランティア・支援者基盤が縮小したこと等から、今年度を区切りに活動を無期限休止することを決定したため、当事業も活動継続の基盤を失うこととなった。

そのため、NPO かしもむらのカシモールの取組みや加子母木匠塾の活動を支援するなど、協力団体の取組みが地域で継続されていくよう協力している。

7-3　事業から得た知見、類似する課題に取り組む団体等に役立つ教訓

①　地域には様々な意思決定組織があるため、地域の新規移住者・新規就農者と連携して活動する場合、その方が全ての調整をできていない場合がある。地域の主要な団体等にも併せて相談しながら、地域内での調整漏れがないことを確認したうえで着手できるとよい。

②　まずは作業的に人手が増えると助かる場合など、部分的なメリットから協力いただくことが多いが、受け入れていただいたことで生じたそれ以外の部分の価値をよく言語化して発信し、協力者と共有していくことで活動全体の価値への理解を広げていけるとよい。

③　まずは単発・短期的な活動に地域外の若者を受け入れながら、地域の受入環境を整備していけるとよい。

④　地域内で動ける人は、既に地域内で様々な役割を担っている場合が多く、さらに労力を上乗せするような協力関係は容易には成立しない。

⑤　地域に滞在し、関心を強めてくれた参加者に対するアフターフォローの戦略が必要である。

⑥　受入れ側のコーディネート力向上のため、主要な担い手間でコーディネーターとしてのノウハウを共有していけるとよい。

8．資料等

・参加学生向け活動後アンケート

①山村スタディーツアーvol. 1

②同 vol. 2

③同 vol. 4

④同 vol. 5 & 6

⑤同 online(2021 年度)

⑥同 online(2022 年度)

⑦ごちゃ馬瀬 Camp!